

探訪 北の風景 66

アドヴィックス 常呂カーリングホール

北見市常呂町

青木和弘



カーリングの聖地・北見市常呂町でこの競技が始まったのは1980年だ。北海道とカナダ・アルバータ州の姉妹提携の縁で、道内各地でカナダ人による「カーリング講習会」が開かれた。常呂町の冬は、大地が雪に覆われ、オホーツク海は流水に閉ざされる。人口の約40パーセントを占める農業や漁業の従事者には仕事がほとんどなかった。カーリング講習会に参加した常呂カーリング協会の初代会長になる故小栗祐治さんは、カーリングこそ、そんな町民が楽しむのに最適なスポーツだと確信した。

道具がないので、ビールのミニ樽やプロパンガスのボンベにコンクリートを詰めてストーンにした。専用のほうきは竹ぼうきで代用した。作った道具は使い物にならなかったが、その熱意は町民に広がり、翌年にはカナダから正式な道具を購入して、町の屋外スケートリンクの一角に2シート（カーリングを行う約5坪×約45坪の氷のエリア）の専用リンクをつくった。カナダの元世界チャンピオンによる指導者講習会を開き、第1回NHK杯カーリング大会まで開催して、ローカルながらテレビ中継もされたから、地元で大ブームになったという。

それ以来、毎冬、屋外に専用リンクをつくった。毎晩水をまいて氷をつくる作業は大変だったから、1988年1月、日本初のカーリング専用屋内リンク「常呂町カーリングホール」（5シート）の完成に関係者の喜びはひとしおだった。常呂町では将来のオリンピック選手育成が目標になり、町民の競技レベルは一気に上がった。

カーリングが五輪の正式種目になった1998年長野五輪から2017年平昌五輪の銅メダル獲得までに、同町だけで14人の五輪選手を輩出しているのだからすごい。現在の施設は2013年に建て替え、国際基準を満たす6シート。2階に観戦席があり、名称は命名権契約で「アドヴィックス常呂カーリングホール」と呼ばれている。

人口約4000人の常呂地区のカーリング人口は住民5人に1人。常呂カーリング倶楽部のリーグ戦が年4回（11月～3月、各16日間）開かれ、



ホールの2階に、ビールのミニ樽やプロパンガスボンベなどにコンクリートを詰めて作ったストーンが展示されている。カーリングのストーンは1個10万円ほど。2色各8個で計16個必要だから160万円するが100年以上使えるという

現在44チームが5階級に分かれて対戦し、年間チャンピオンの座を競い、五輪選手が育ってきたのだ。青春映画のモデル「シムソング」は、関和章子（旧姓加藤）、小笠原歩（旧姓小野寺）、船山弓枝（旧姓林）が中学1年のときに結成したチーム。高校から松沢美香（旧姓堀）が加わり、ジュニアでは無敵を誇り、4人とも五輪選手になった。世界に挑む選手を育てる際の悩みは、地元で中部電力や北海道銀行のようにチームを持てる大企業がないことだ。小笠原や船山も、五輪を目指すために地元を離れ「チーム青森」に身を置いた。2002年と2006年の五輪出場を果たし、カーリングブームを巻き起こし、後に北海道銀行から2014年ソチ五輪に出場し5位入賞を果たす。



アドヴィックス常呂カーリングホールは国際基準を満たす6シート、2階に観戦席がある。1シートの使用料は1時間一般1400円（高校生720円、中学生以下280円）、シューズ・ブラシ・スライダー1組120円。ストーンは無料



ホールには平昌五輪で銅メダルを獲得したロコ・ソラーレ北見のサイン入り写真が展示されている。左から藤澤五月、本橋麻里、鈴木夕湖、吉田夕梨花、吉田知那美の各選手。2階には五輪選手のユニホームやカーリングの用具の変遷などが展示されている

一方、マリリンこと本橋麻里は、地元で五輪チームをつくるため、チーム青森を辞めて地元に戻り、ロコ・ソラーレを立ち上げた。メンバー全員が北見市内に勤めながらトレーニングに励んで、みごと平昌五輪で銅メダルを獲得した。

常呂町のカーリングは次のステージに挑んでいる。カーリングチームが海外遠征などの活動に必要な資金は年間3000万円だという。これらの資金は地元企業などから支援を募るのだが、持続可能なものにするのは簡単ではない。しかし、有望な選手が地元で五輪の頂点を目指すなら、それは地方の大きな自信になり、子どもたちに夢を与えることができるに違いない。それが名選手たちを育ててきた小栗さんの描いた夢ではないだろうか。頑張れ、ロコ・ソラーレ！（敬称略）